時間旅行 ムナカタ Plus №7

減る生物、増える生物

～『新修宗像市史』自然部会から～

北側を玄界灘に面し、東部には四塚連山がそびえ、市内中央には釣川が流れる宗像市には、多様な自然環境があり、そこには数多くの生物が生息している。新修宗像市史の編さんに際して、多くの研究者や協力者が生物調査に関わり、１５００種を超える動物、約１３００種の植物が宗像市に生息していることを明らかにした。しかし、この種数には、アリやクモなど宗像市内に確実に生息する種であっても、それらを扱える専門家がいなかった生物群は含まれてない。したがって、実際には数倍～数十倍の生物種が宗像市に生息していることは間違いない。

減る生物

多くの生物が絶滅の危機に瀕していることが、テレビで頻繁に取り上げられている。生物の絶滅と聞くと、熱帯のジャングルなど手付かずの自然に生息する生物が、自然破壊によって消えていくシーンを想像する人が多いだろう。しかし、絶滅の危機に瀕している種には、身近な環境に生息しているものも数多く含まれている。例えば、近年、宗像市から消失した植物は、自然性の高い山奥に生息する種よりも、ため池に生育する湿性・水生の植物やため池堤に生育する草地生の種の方が多い。また、以前は水田などで普通に見ることができたトノサマガエルやツチガエルが１９８０年代以降は宗像市内でほとんど見られなくなった。これら生物は、人間が快適・安全に生活するために、ため池や水田の水路を改修し、水の管理方法を変えたことが原因であると考えられる。このような人間生活に近い環境に生息する生物を保全するのは、人が寄り付かない原自然に生息する種を保全するよりも難しいと言える。

増える生物

一方で急速に個体数を増やしている生物種もいる。外来生物である。外来生物とは、意図的・非意図的を問わず、人間活動によって本来の生息場所から別の場所へ移動した生物を指す。そして、これら外来生物が、時に在来の生態系や農作物、さらには人間の健康に被害をもたらすことは、今ではよく知られている。新修宗像市史の編さんを通して、宗像市にも数多くの外来生物が生息していることが分かった。その中にはセアカゴケグモのように人間に直接害を与える種だけでなく、身近な動物の代表格と言えるダンゴムシ（正式にはオカダンゴムシ）や春から初夏に道端に花を咲かせるハルジオンなども含まれている。

これら外来生物が好む生息地には（全ての種ではないが）ある特徴がある。それは、住宅地周辺や農地など人間生活に近い環境を好む点である。そもそも外来生物とは人間の影響によって移動した生物なので、人間が作り出す環境に適応した生物が外来生物として成功しやすいと考えれば合点がいく。

このように私達の身の回りでは、在来生物が減り、外来生物が増えている。宗像市に日本在来の多様な生物を末長く維持するためには、私たちの生活空間に住む生物のことを良く理解することが大きな一歩となるだろう。

（自然部会　唐澤重考）

オカダンゴムシ

ハルジオン（撮影：福原達人）